

TENTI TODAY			1
会員の広場			2
随筆	「日々をいとおしみて」より「残響」	宮川典子	2
歴史	維新の元勳「大久保利通」についてーその1ー	臺一郎	5
歴史	「了解日本(日本を知る)」「(12)」「3つの民話から」	兪彭年	7
調査	水産加工品はこうして作られる(下)	林英一	10
回顧	有楽町慕情(9)「矢野恒太と石坂泰三」	津田孚人	12
講演会のご案内・新三木会			15
事務局			15

TENTI TODAY

記録的な猛暑にクーラーをつけっぱなし、体調管理が大変です。一方で九州、東北など各地で記録的な大雨が報じられ、家、家財などを流された方達の茫然とした顔に、自然界の反撃を強く感じます。しばらくは、我慢し耐える以外なさそうです。

TV・新聞などで、「生成 AI(人工知能)」、「チャットGPT」などの単語を見る機会が増えました。高齢者には、理解しがたい単語ですが、「成長の起爆剤にしたい」と政府が旗を振っているので、あらゆるところで検討が進み、実用化されそうです。しかし、海外は慎重のようですし、国内識者にも慎重論が多く見られます。一部の人に良くても、多数の人たちにはためにならないことが度々あります。混乱が起きないといいのですが。

マイナンバーカードの混乱が続いています。その責任がシステムを請け負った富士通にかぶせられているようですが、取得手続きをしたときに現場で作業をしていた人から富士通の社員ですと自己紹介されたことがありました。あれから、だいぶ経ちます。メーカーも人が変わっていますから、丸投げしたシステムの、変更、修復は、大変なことが予想されます。高齢者は、健康保険が宙に浮くのが一番困る。

書店で、推薦図書となっていた「黒い海・船は突然、深海へ消えた」(伊澤理恵著・講談社)を買い求め読みました。2008年、太平洋上で停泊中の中型漁船が、突如沈没、17名の犠牲者が出た事件、事故調査員会が設けられ報告書が出ましたが、救出された船員の証言と大きくかけ離れている。天災(大波)によるものではなく

人災（潜水艦、衝突）の線が強い。沈没した漁船の実査をすれば分ることだが、出来ないのか、出来てもしないのか、いずれにしてもしない。著者の綿密な思考と調査意欲に引っ張られ、一気に読んでしまいました。

会員の広場

エッセイ集 宮川典子（94歳） 「日々をいとおしみて」（2022年11月）より

「残響」

ある日曜日、サントリーホールで、前橋汀子のヴァイオリン・コンサートが行われた。ここへ来るのは何年ぶりだろう。空はよく晴れて爽やかな風の吹く広場で、開場を待つ間しばしを木陰で憩う。ホール内はコロナ禍のため入場制限があり、座席は一人置きである。空席は一つもなかった。

やがて明るく照らされたステージに、深紅のドレスの汀子が現れる。初めの曲は、ベートーベンのヴァイオリンソナタ「クロイツェル」である。彼女の奏でる音は、なんて力強く響くことか。こちらも自ずから緊張感が増す。

その美しい音色に心引かれながら、なぜか夫の父のことが頭をよぎる。クロイツェルソナタと義父とのつながり、それは音楽ではなく、トルストイが書いた同じタイトルの中編小説である。内容は決して生易しい話ではなく、その曲から殺人事件に発展する重々しいものだ。ベートーベンの「クロイツェルソナタ」は、トルストイが取り上げたくなるほど迫力を持つ曲であったのだ。18世紀末、発表されたその小説を、19世紀早々ロシアに行った義父は、多分原語で読んだであろうと想像した。

義父、宮川船夫は、東京外語学校に入学してロシア語を学ぶ。ロシア文学で有名な「戦争と平和」「罪と罰」「カラマゾフの兄弟」を翻訳した米川正夫や中村白葉とは同級生だったそうだ。

1913年、船夫は外務省留学試験に合格、外国語学校を中退して、ロシアの首都にあるペテルブルグ大学へ入学、ロシア語に一層磨きをかけた。外交官を志した動機は、日露戦争時の旅順講和会議で通訳を務めた川上俊彦に憧れたからだ、後に義母から聞いたことがある。大学在学中には様々な経験をしている。

例えば、根元がぐらつき始めたロシア帝国で、後のソ連外相モロトフと交際があり、彼を通して学生の社会運動に接触があったことや、亡命中のゴーリキを訪れたことなどである。その旅行記が、戦前の日本の雑誌に載ったそうだが、ゴーリキに会った日本人は義父と外に一人と聞く。

大学卒業後、彼は露都ペテルブルグにある日本大使館を訪れ、通訳官として採用された。二年後、高等文官試験のために帰国したが、当時の外務次官から、対露外交の重大な折すぐロシアに戻るよう説得され、受験を断念した。彼はロシア語だけでなく、革命前後のロシアの世相にかなり通じていたようだ。

1917年、ロシアではレーニンに指導されたポリシェヴィキにより革命が起こり、日本との関係も一時悪化する。

1925年に日ソ基本条約が調印され、名実共に日ソ外交関係が再開された。これ

にも義父は北京公使館一等通訳官として任に当たった。

その年、再びロシアへ赴く船夫は、妻と幼い長男を伴って、新しい首都モスクワに着任した。翌年生まれて、将来私の夫となる次男と4人、揃って日本大使館公邸に居住した。

今私の手元にある一枚の古びた写真は、モスクワ郊外の広い野原で、義母と二人の幼子がきのこ狩りをしている。家族全員が揃ったこの頃が、彼らにとって最も幸せな時期だったのではないだろうか。

1941年の日ソ中立条約締結時にも義父は松岡外相を補佐した。日ソ間は大変厳しい状況にあったのだ。しかし、義父は、親ソ派ではなく、世界的視野を持っていたと聞く。

ところが、1945年、最悪の事態が起こる。太平洋戦争終戦直前、ハルピン総領事であった義父は、その中立条約を破って侵攻してきたソ連軍に拉致されたのだ。長い間消息不明で、日本にいる家族は彼の安否を心配し、あらゆる方法で情報を求めた。しかしながら、モスクワの監獄で病死との知らせが死後7年経った1957年に届いた。その間に彼の次男と結婚した私には、スターリン下のソ連は恐ろしい国だとの認識がずっと残っている。

さて、その日の前橋汀子のコンサートは、ますます佳境に入ってゆく。「クロイツェルソナタ」の次は、バッハ最高傑作と言われる無伴奏「シャコンヌ」である。彼女の全身を使っただけの激しい動きから、荘重な音色が響き渡る。これらの大曲を続けて弾く汀子の体力は、長年にわたって培われた努力の賜物であろうか。

30分の休憩の後の第二部は、小曲を7曲、いずれも親しみ易いものである。中でも「モスクワの思い出」は、ロシア民謡「赤いサラファン」の曲想を取り入れたヴィエニャフスキの作曲で、汀子はロシアで修行した頃を思い返していたことだろう。聴衆をしんみりした気分させてくれる。

このコンサートに来る前に私は、誘ってくれた友人から汀子の自叙伝を借りて読んでいた。汀子は、4歳からヴァイオリンの稽古を始め、帝政ロシアの貴族小野アンナに師事し、その縁で早くからレニングラード音楽院に留学することを目指していた。そして学校の勉強や音楽に忙しい中、毎日曜、代々木までロシア語講座に通ったそうだ。汀子が高校二年生の時、やっとチャンスが訪れた。1961年、レニングラード音楽院が創立100周年を記念して、共産圏以外の国から初めて留学生を受け入れると発表したのだ。汀子と他に1名が選ばれて日本を立つことになった。

その5年前に、日ソ共同宣言でソ連との国交が回復したとはいえ、17歳でペテルブルグへ旅立つ汀子の勇敢な行動には感嘆せずにはいられない。明治、大正時代の私の義父と、昭和の汀子とは、境遇も留学の目的も全く異なるが、唯一共通しているのは、最高のものを求め強い精神力で未知の世界へ踏み出したことである。

汀子らは横浜港から船と汽車、飛行機を乗り継ぎ、一週間後音楽院にたどり着く。世界中から学生が集まるその寮は、思いもかけない粗末なもので、不安だらけの生活が始まった。しかし学院には世界的な演奏家が揃っていて、汀子はその教師たちから必死に学んだ。

こんなこともあった。ある日、中国から来ていた8名の男子学生が忽然と姿を消した。留学生は自炊なので、毎日調理場で顔を合わせ、時にはおいしいぎょうぎょうを御馳走になることもあった。それが挨拶もなく去るとは、と不思議に思っていたが、後になって思い当たるのだが、中ソ対立が表面化し、政治的圧力が加えられたらしい。

日用品は相変わらず不自由であったが、さすが芸術の都だけあって、極上の音楽

や演劇、オペラ、バレエ、絵画などが、安い入場料で鑑賞出来る。

一つ忘れられないことがあった。汀子がワイマン先生から、チャイコフスキーの「ヴァイオリン・コンチェルト」のレッスンを受ける日、彼女が弾き始める前に言われた言葉だ。「汀子、ユフゲニー・オネーギンをまだ見ていないなら、先に見て来なさい」。そのオペラはプーシキンの韻文小説が原作で「それを理解していなければコンチェルトは弾けないよ」との先生の教えだった。幸い、オペラの殿堂キーロフ劇場は学院のすぐ前にあり、見る事が出来た。曲の背景にある歴史や文化、伝統を先ず学べということだ。彼女はそれ以来、エルミタージュ美術館に足を運んだり、文豪の小説を読んだりした。このようにしてチャイコフスキーの「ヴァイオリン・コンチェルト」は、今も汀子の重要なレパートリーの一つになっているようだ。

彼女は1年留学の予定を三年に延ばし、日本に帰国したが、三年後にはニューヨークのジュリアード音楽院へ入学した。何もかもが窮屈だったソ連と違って、物が溢れ賑やかなアメリカだ。彼女は両方の国でそれぞれ貴重な体験をしたと思う。その後、ヨーロッパ各国に滞在、旅行も数多く、世界的なコンクールに何度も入賞し、今や偉大なヴァイオリニストの地位にある。

私の家は、義父がソ連で悲惨な最期を遂げたが、義母と、後に生まれた二人を加えて四人の息子は、戦後の苦しい時期を力を合わせて乗り越えた。今はもう誰もこの世にいない。昔から子供の学校の関係などで、家族全員が一堂に暮らすことが少なかったが、ようやくあちらの世界で六人が楽しく語り合っているかもしれない。

私は、この義父と直接会うことは適わなかった。しかし、夫と共に過ごした60年の間に、知らず知らず義父の誠実さと強さを身につけたような気がする。そして汀子の音楽を聴いている時も、その思いを一層強くした。それはロシアの大地から得たものなのだろうか。

我家の玄関の壁に、ロシア人が描いた四十号ほどの大きな画が飾られている。画の半分近くを占める原生林は、喬木である。中央に流れる川は澄み、右岸の小高い丘に民家が二軒、自然を愛した義父が求めたものだ。片隅に、制作年の1901と画家の名前が見える。私は大切な義父の形見として日夜、仰ぎ見ている。

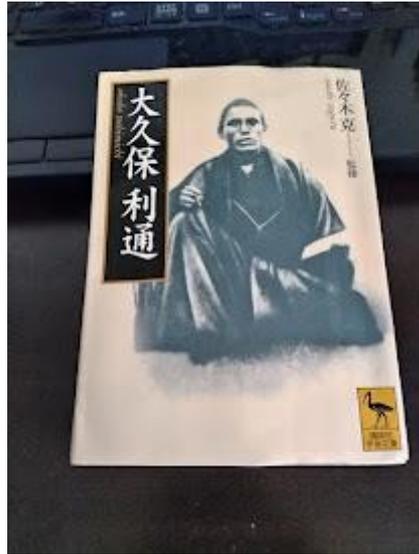
夫は生前、ロシアの小説を愛読していて、私も読むようにとよく勧められた。戦後初めて来日したモスクワバレエ団の「白鳥の湖」や、チェーホフの「三人の姉妹」「桜の園」の演劇を義母と三人で見に行ったことも思い出される。

前橋汀子のコンサートの帰り道は、気分が高揚し爽快であった。90歳を超え、家にこもりがちな私。久しぶりの遠出なのに少しも疲れを感じない。音楽はこれほど人の心を癒し和ませてくれるものなのか。と同時にロシアという共通点を持つ汀子と義父、国際的なヴァイオリニストと一介の外交官を並べて語るのは大変失礼と思いながら、二人をごく身近に感じているのも事実である。

汀子のかきならすあの美しい音色は今も耳に残り、自室にある義父母のやさしい目をした写真を眺めながら、私は生き生きと日々を送っている。

維新の元勳「大久保利通」についてーその1ー 臺 一朗（75歳）

佐々木克監修「大久保利通」



佐々木克己が監修した講談社学術文庫「大久保利通」を読んだ。徳川幕府の治世に終止符を打ち、明治維新を実現して近代日本の礎を築いた政治家 大久保利通の伝記本である。

30代後半まで薩摩藩士であった大久保は29代薩摩藩主島津忠義の実父で後見役の島津久光のもとで薩摩藩の公武合体路線を主導し、その後は倒幕路線へと転じて、薩長連合を成立させた。更に京都の公家 岩倉具美らと結んで王政復古を断行、藩籍奉還や廃藩置県などを矢継ぎ早に実行して新政府の樹立に大きく貢献した。

維新政府では参議や大蔵卿等を歴任した後、明治4年「岩倉遣外使節団」に木戸孝允等と全権副使として参加し、2年間にわたり欧米の政治・経済・社会を視察した。帰国後は内務卿として地租改正や殖産興業による近代国家作りに尽力した。しかし1878年（明治11年）5月14日、馬車で皇居に向かっていた大久保は、紀尾井坂付近で不平士族6人に襲われて殺害され、49年の生涯を終えた。

倒幕や維新実現への多大な貢献にもかかわらず、当時も今も大久保利通の国民的人気は同じ薩摩出身の西郷隆盛と比べて気の毒なほどに低い。自分は個人的にこうした国民的人気は低いが、国家や政府への貢献が大で数々の実績を残し成果をあげた政治家や軍人に興味がある。

以前このメルマガで、やはり明治の元勳で日本陸軍の礎を築いた軍人山縣有朋を書いた。彼も乃木希典などと比べるとその国民的人気は全く低かった。ところで、大久保が何故不人気なのかと言えば、彼の性格が陰気っぽく陽気さに欠け、気むずかしそうな雰囲気醸成し、さらには国民的人気が圧倒的に高かった西郷隆盛を西南戦

争の首謀者として自決に追い込んだ中心人物と見なされたことなどが大きく影響していると思われる。その辺りの事情をもう少し詳しく知りたいと思い、前述した講談社学術文庫の「大保利通」の他に倉山満著の徳間書店「大久保利通」などを読んだり、ネット検索で人物像や政治家としての足跡等を調べたりした。

大久保は、西郷隆盛、木戸孝允とともに、明治維新を代表する「3傑」とも言われた人物だ。それ故に人物像や政治家としての足跡を一回の投稿のみで書ききるのには正直しんどい。よって今回は取りあえず 30 歳頃までの若き日の大久保の人生や人物像をまとめてみた。

大久保利通は 1830 年 9 月 26 日(文政 13 年 8 月 10 日)に薩摩国鹿児島城下の高麗町で藩士大久保利世と母福の長男として誕生した。その後間もなく、同じ城下の加治屋町に引っ越したが、そこは薩摩藩でも 150 石以下の藩士が住む町であった。そのことから、大久保家の家格が下級藩士であったことがわかる。

加治屋町の青年組織である郷中では、生涯の友となる西郷隆盛、税所篤、吉井友美らと少年時代から青年時代を共に過ごした。とりわけ西郷とは単なる友人関係を超越する兄弟のような間柄で、大久保の父親が遠島処分を受けて経済的に苦しくなった際には、西郷が大久保を精一杯助けたという。一方大久保も、後に藩主島津斉彬の死に伴う藩内のごたごたで西郷が失脚し奄美大島に遠投された際には、藩主島津忠義の実父で後見人となった島津久光に西郷の帰国を熱心に働きかけ実現させた。

さて少年時代の大久保は相当な悪戯っ子で、薩摩国では禁じられていた桜島噴火口への投石をしてみたり、入来温泉の泉源をいじって冷水を流し湯治客を驚かすなどの悪戯をやったらしい。しかし少し年長になるにつれ、いたずら癖は治まり、篤実な深い考えの青年へと成長し、挙動も沈着になったという。

ちなみに大久保は、武術は得意ではなかったが、学問は郷中の少年や青年の中でもぬきんでて優秀であったようだ。明治維新の幕開けと共に、維新政治のリーダーとなった人物だけに、生まれつき頭は相当良かったようだ。

また子供の頃から大久保は人に親切で、とりわけ親戚のものが病気にでもなれば献身的に看護看病したという。大久保の叔母に当たる人が熱病に罹患した時など、悪臭を嫌がって皆が看病を嫌がる中で、大久保は 15, 6 日間も昼夜に渡り付き添って看病したと言われる。大久保には三人の妹がいたが、彼は彼女らをとても可愛がり、「これからの世は女子でも字を知らなければいけない」と言って、筆や紙を買い与え、妹たちに字を教えたと言う。

1844 年(弘化 1 年)、14 歳となった大久保は元服して正助と名乗るようになった。それから 2 年後の 1846 年(弘化 3 年)、16 歳となった正助は薩摩藩の記録所で書役助として出仕するようになった。しかし正助が 20 歳になった 1850 年(嘉永 2 年)、薩摩藩のお家騒動に巻き込まれた父の大久保利世は喜界島に遠島処分となり、正助も罷免され、一家は謹慎処分となって収入を失った。

正助は、ショックで病身となった母を看護し、三人の妹を養育し、遠島された父親への仕送りもしなければならなくなり、経済的に非常に苦しい状況に追い込まれた。大久保は親戚からの借金や友人西郷らの援助によりなんとかこの苦境を乗り越えたが、こうした苦労は大久保を人間的にも大きく成長させた。

ところで大久保は少年から青年になるにつれ、身体的にもかなり大きくなった。成人となった大久保の身長は 178~180cm もあったという。幕末期の日本人男性の平均身長は 160cm 弱なので、178cm の大久保は明らかに大男である。

ちなみに大久保の親友の西郷隆盛は 180~183cm、藩の同輩村田新八は 185cm、同じく川路利良は 170 後半であり、島津家 29 代当主の島津忠義も 185cm と西欧人が驚くほどの高身長であったという。

薩摩には何故このような高身長が多かったのだろうか。薩摩藩は早くから琉球との貿易を通じて中国の食文化が流入し、薩摩汁、とんこつ、炒豚などの豚肉料理による動物蛋白の摂取量が多かったからではないかと言われている。

さて、1853 年(嘉永 6 年)に島津斉彬が 11 代薩摩藩主で 28 代の島津家当主となったことにより、大久保親子の遠島及び謹慎処分も解け、正助は記録所に復職し御蔵役となった。そして 1857 年(安政 4 年)27 歳の時に、やっと徒目付となった。

翌 1858 年(安政 5 年)藩主島津斉彬は急逝したが、正助は 12 代薩摩藩主で 29 代島津家当主 島津忠義の後見役の島津久光の囲碁相手となり、久光の覚えめでたき存在となった。その後間もない 1860 年(万延元年 3 月)には勘定方小頭格となり、翌文久元年 10 月には御小納戸役に抜擢されて重役として薩摩藩の藩政に参与するようになった。

徒目付から御小納戸役まで四年足らずという大久保の出世は、薩摩藩でも類を見ないほどに早いスピード出生であったとされ、大久保が当時の実質上の藩主であった久光からいかに評価され、頼りにされていたかを示している。

(以下次回に続く)

「了解日本」(「日本を知る」(第 12 回))

愈彭年 (86 歳)

[江戸文化の中の明・清文化] 第 7 章 3つの民話から

一. 徐福の東渡伝説

この伝説は中国でも日本でも有名で、秦の始皇帝の『史記』や『淮南衡山伝説』の最初の部分で登場する。秦の始皇帝は、蓬萊・方丈・瀛洲の三神山に不老不死の薬があると聞き、徐福と盧生に命じて採集に行かせた。2 隻の船で別々に探したが、盧生の船はある島に漂着し、盧生は処罰を恐れてそのまま戻らず隠居生活を送った。徐福は長い間漂流したが、三神山が見つからず、手ぶらで帰ってきた。

徐福は神々に私が持っていったお土産が少ないため、不老不死の薬は与えることはできないと言われたと嘘をつき、さらには海に魔物が騒ぎたてるので、今度行くときは弓矢と武器を持って行くと言った。

紀元前 210 年、徐福は大船団を率いて 2 度目の薬の採集に出かけ、今回は 3 千人の少年少女と百人の労働者、そして五穀の種子を携えた。大船団が三神山を見つけられることは出来ず、代わりに平野と広い湿地にたどり着いた。徐福はこの地が温暖で、風光明媚で、人々が親切であると思い、上陸し自ら王となりその後、秦国に戻らなかった。

不老不死の薬を採取しに行くのに大船団が必要なのか? こんなにたくさんの少年少女と労働者を連れていく必要がある? 五穀の種を持参する必要があるのか?

艦隊、人員、装備はすべて徐福の要請で秦の始皇帝が準備したものである。薬の採取は、秦の始皇帝の定めた目的であったが、徐福には別の目的があったのだろうか。伝説の結果から判断すると、徐福が行ったのは薬の採集ではなく、本当の目的は集団移民だった。

どうして秦の始皇帝は、この嘘を見破れなかったのだろうか。これは事柄というものは偶然によって起こるものと言え、この伝説は、実際に東へ移住する集団があったことを示唆しているのである。

3,000 人の少年少女の数は、子孫繁栄に必要な基礎人口であり、100 人の労働者は、自然に都市や住宅を建設して手工業の産業を構築し、穀物や種子は農業の開拓に利用する物であった。徐福は自分の目的に従って計画したのだ。

徐福が東に渡ったのは紀元前 210 年のことである。当時日本が縄文文化（大陸から伝播した東夷文化）であり、狩猟・漁労・採集が基本的な経済形態であった。

徐福がもたらした秦の文明は、縄文文化よりもはるかに高度であり、この地域としては先進的な文明であった。先進文明が後進文明に取って代わり、文明人が後進の文明人を支配し、二つの集団が次第に同化していくのは、社会発展の法則である。

徐福は王となり、秦の文明が進んでいることから、地元の人々から支持されるようになった。徐福は、米や蚕の栽培、布の紡ぎ方や織り方、錬り方や鍛え方、漁や網の織り方、薬の採取や病気の治療、秦国の習慣や儀式などを現地の人に教えたと伝えられている。

日本の縄文文化は弥生文化に、徐福がもたらした秦文明は縄文文化となり、弥生文化に変化していった。

徐福が東に渡ることができれば、他のグループや集団も同じように東に渡ることができる。日本は新天地のようなもので、さまざまな理由でそこに留まることのできない集団や海を渡って漂流した集団が、新天地を開拓し、また徐福のように自分を王として立ててその地を支配しようとする者など出てきた。

さらに渡来を続けるうちに、各地から大小の支配集団次々と出現し、高度な文明を持ち込んで弥生文化に融合していったのである。弥生文化は、大陸と朝鮮半島から持ち込まれた高度な文明が融合したものであった。

天皇の祖先は、朝鮮半島から海を渡って日本の南九州に漂着した集団の一人である。

徐福の遺跡が、各地に遺されている。佐賀県佐賀市の金成神社、和歌山県新宮市の墓、京都府伊賀町の新井崎神社、岡山県倉敷市の徐福石像、秋田県男鹿市の徐福塚など。場所によっては徐福の上陸記念碑や、徐福の名を冠した公園や植物園などがある。

徐福がどこに上陸したかは定かではないが、九州地方の佐賀、長崎、福岡、鹿児島が有力視されている。徐福が上陸すると、いろいろな場所を訪れ、地元の人が「到来した」と言う可能性があるのも、碑や祠などの遺物があるのもである。

いずれにせよ、徐福はこの地に高度な文明をもたらしたので、どこでも歓迎された。徐福の子孫は秦の字を姓とし、日本語の読みは「ハタ」、読みは同じ「羽田」、「波田」、「波多」などの姓で、その祖先が秦代に渡来した移民であることを示している。

二．桃太郎の物語

この物語は、日本では大人から子供へ語り継がれる名作であり、敗戦前の小学校では、この物語を題材にした歌「桃太郎さん」が教えられていた。

昔々、おばあさんが洗濯をしに川へ行くと、桃が流れてきたので拾って帰った。家に戻っておじいさんに見せると、包丁で切り開いた。桃は二つに割れて、中には男の子がいた。その男の子を養子に迎えたおじいさん一家は、桃太郎と名づけた。

桃太郎はすくすくと育ち、賢く、たくましく、立派な男になった。島のオニが略奪や悪さをしているという村の噂を聞いた桃太郎は、鬼退治をしに行くことを決意した。桃太郎が旅立つとき、二人の老人は道中のお供にと、きび団子を作る。途中、鶏、猿、犬に出会い、みんな団子をくれというので、桃太郎は「私の召使いになればあげよう」と言い、みんな召使になって一緒に鬼退治に行った。

主従が鬼城を攻め、鶏が鬼の目を突き、猿が鬼の顔を搔き、犬が鬼の足に噛みついた。鬼たちは降伏して宝物を差し出し、桃太郎と下男たちは宝物を満載した車を持って帰ってきた。

桃太郎とは何者？ 桃が川に流れたということは、原住民からではなく、よそから移動してきたということであるから、大陸から東に来たということになるのでしょうか。桃の原産地は中国大陸である。

鬼の正体は？ 鬼は通常、頭に角があり、がっしりした体つきで、髭を生やし、顔は歪んでいて、上半身は肩をむき出しにし、下半身は腰の周りに毛が生えていて、足はむき出し、色は赤茶色、手には塊の鉄棒を持っており、力強く野蛮な印象があり、恐ろしいとされる。

鬼は山に住んでいるが、物語では島、つまり村から遠く離れたところに住んでいる。この対比は、桃太郎が文明的な移民で、鬼は野蛮な原住民であることを暗示している。高度な文明をもたらした移民が平野を支配し、後進国であり文明を持つ原住民は次第に同化し、同化しない者は貧しい田舎や深い森に追いやられ鬼となる、という設定である。

鶏や猿や犬が桃太郎の召使いになったということは、先進文明が彼らに利益をもたらすため、多くの先住民が桃太郎を擁護していることを説明した。

この物語は、文明化された後進的で不従順な原住民が、文明化された先進的な入植者によって一掃されることを説明しているのである。

桃太郎の物語は、高度な文明を持って渡ってきた渡来人と、文明が遅れた原住民との間に対立や紛争があり、その結果、渡来人が原住民を整備し、処罰していたことを示し、日本各地で語り継がれてきた。

三 大国主命が天照大神に国土を譲ったという神話

島根県松江市の出雲地方には有名な出雲大社がある。神社の西から1キロ離れた海辺に観光地「稲佐浜」があり、ここは神話上の大国主命(オオクニヌシノミコト)が天照大神の使者と縄張り譲りの交渉をした場所である。大国主命は地元出雲地方の部族長、天照大神は奈良地区大和部族連盟の首長である。交渉の結果、大国主命は天照大神に地盤を譲った。天照大神はその見返りとして、土地を失い行き場を失った大国主命のために出雲大社を造営し、冥界の神を司り冥界の祭祀を行う大社の主祭神としたのである。

日本の旧暦の10月は「神無月」と呼ばれ、大国主命が主宰する「神議」にすべての神が出雲大社に行くため、神不在を意味する。現世の自然界を天照大神と大和部族連盟が神々を支配していた。

西暦720年に書かれた今昔物語「日本書紀」の冒頭の神話では、日本は「幽」と「顕」の二つの世界からなり、「幽」の世界は、冥界が支配しているとしている。冥界である「幽界」は出雲大社の主祭神である大国主命が支配し、陽の世界である「顕界」は大和の天皇が支配していたのである。

大国主命の一族とは、どのような一族なのか？『後漢書』(侯漢書-東夷伝)によると、倭人は九夷の中の一つである。考古学の研究によると、日本海沿岸の出雲、丹後、越後地方の倭人は、朝鮮半島からの鉄の密輸を積極的に行い、力を発揮していたようだ。大国主命の部族は、出雲地方を支配した実力のある倭人集団であり、彼らの文化は縄文文化であったと推測される。

天照大神は、“高天原”の天上におられ、彼女の子孫は下界に下り、「天孫降臨」と呼ばれ、場所は九州宮崎県日向の高千穂(宮崎県と鹿児島県の県境にある霧島という説もある)。天下り後、一時期統治を実施し、周囲の文明的に遅れた部族を收容し、実力をつけた後、東征を行って奈良地方に移住した。

天孫は先進的な弥生文化を用いて、すぐに周囲の文明が遅れた部族を收容し、大和部族連合(通称大和政権)を樹立した。中心は天照大神に仕える先祖天皇氏族集団であった。大和部族連合は拡大し続け、日本海沿岸にある大国主命部族の領土も併合していった。神話では礼譲と言われているが、実際は武力や敗戦によって奪われた可能性が高い。武芸が高く「八千矛の神」と仰がれていた大国主命はどうやって冥界を支配したのだろうか。この世の世界にいないせいかもしれない。神話伝説は後世の人が天皇の立場に立って作ったもので、天皇を美化しているため、不利なことに、触れないのは当然である。

現在、大国主は「縁結びの神」として全国に知られており、年に一度、「前世の婚姻」を決める神々の「神議」を主宰している。だからこそ、男性も女性も幸せな結婚を求めてやってきて、その効果は絶大だと信じられているのである。

この神話は、3世紀後半から7世紀にかけて、古墳時代の日本統一王朝である大和朝廷が成立したことを反映している。大国主命一族の消滅は文明衰退(縄文文化)によるものであり、天照大神はその先進文明(弥生文化)により大国主命に領土譲渡させることができたのである。

水産加工品はこうして作られている(下) 林 英一 (86歳)

水産加工品は、日本人の食卓に欠かせない。大量の消費に応えるために、生産、製品化のそれぞれの段階で、専門の器械が活躍している。知られざる器械の幾つかを、取り上げてみる。原稿が、専門誌に掲載されたものと同じものなので、やや硬く、理解しにくいところもあるかもしれませんが、ご容赦ください。(林)

(5) 骨肉分離機

TR 骨肉分離機 Chiby は、平成 20 年(2008 年)石井達雄氏が設計したもので当初は小規模な鶏肉処理工場用に 1 人 - 2 人でガラから骨肉分離作業ができる機械として世に出た。ネーミングのチビは小型で高さを 93cm と低くして作業しやすいようにしたからで、作業者が障害者(知的障害者も含め)であっても使いこなせるように機械の高さを抑え、原料から製品、残滓まで一連の動きが見える方式を採用した。従って[安全対策]を重視して安全装置を4カ所取り付けられている。

この機械は 10 年近い試行錯誤でようやくものになった。部品はアメリカ ウィスコンシン州の Thomas Precision, Inc が製造し、モーターやインバーターなど制御にかかわるものは国産、組み立てて完成品に仕上げるのは日本国内の工場ということであってオリジナルの国産機械である。

現在の TR 骨肉分離機 Chiby(チビ)では 魚の大小に関係なく、ドレスでも 3 枚卸で出てくる中骨からでも鱗の硬軟に関係なく骨と可食部分離が可能である。歩留は一般的に 中骨から 50%、ドレスは魚種により異なるが 65~80%、時間あたりの出来高は 150 kg から 800 kg と大きく違うがその作業は 1 人-2 人で出来る。ミンチ肉を落とし身、スリミと呼ぶと誤解を呼びかねないのでチビ身と称している。

現在日本では 16 台が北海道から宮崎までの地域で稼働している。原料は、サケ、サバ、マグロ、カツオ、ブリ、タイ フグ、ハモ、イサキ、ボラ……。製品は、サバすり身商品、つくね商品、学校給食、自社でミンチから食品までの製造販売一体化で“カツオそぼろ”をスーパーの目玉商品にまでしている会社までいろいろある。大手回転寿司チェーンでは、自社で刺身を取った後の中骨からの肉ミンチで、さつま揚げ、雑魚のドレスからフィッシュバーガーまで作っている。

海外での機械の活用は国内より早く、USA(アラスカ)、チリ、タイ、ベトナム、台湾で稼働しており、一番多いのは 養殖鮭の中骨からのミンチ製造である。

海上投棄やごみ扱いに近かった原料は TR 骨肉分離機 Chiby の出番で生かされてくると期待がある。

(6)自動海苔乾燥機

板海苔の製造方法は、なかなか連続生産の機械化がされず、それこそ江戸時代と大差なく採取後、選別、洗浄、刻み、真水と混合、紙の様に漉き、簾へ……。そして水分が多いのでゆっくり天日で乾燥、乾燥後剥がして製品となる工程であった。

そこに乾燥海苔連続製造装置が機械として昭和 47 年(1972 年)に杉原製作所が開発を試み、杉原式連続海苔乾燥装置として世に出たが、乾燥工程が従来のように自然に脱水させて乾燥させるので効率も品質も良くなかった。

しかし翌昭和 48 年(1973 年)構想としては優れていると判断したニチモウ株式会社研究開発室でより高度な性能の良い機械を構想、杉原製作所と開発に着手、昭和 50 年(1975 年)全自動乾海苔製造装置(ニチモウワンマン)1 号機を世に送り出した。

この機械は板海苔乾燥の効率向上、並びに品質向上に貢献した。発売開始から年間の出荷台数は 100 台を超え、昭和 55 年(1980 年)には装置一台の生産量増加を狙い、4 連式から 5 連式への転換も行った。

この年の出荷は 700 台を記録、その生産量は 71 億 5000 万枚でこの年の経営体は 3.7 万であったがこれは昭和 30 年(1955 年)経営体約 7 万の生産量が 40 億程度であったことを考えると機械の貢献度は大きい。

平成 5 年(1993 年)には年間最高記録 109 億 8000 万枚を記録しているが、経営体はその後も減少し、平成 27 年(2015 年)にはわずか 2492 となり生産量も 78 億 3,800 万枚と落ち、海苔そのものの需要が大幅に減少した。

これに追い打ちをかけたのが異常気象と、5 連機タイプの機械開発の無理が原因でおこる故障と無償修理というサービスがあだとなり、平成 5 年(1993 年)まで海苔そのものの生産は増加したが、皮肉なことに機械需要は昭和 55 年(1980

年)をピークに衰退してゆき、競合他社の台頭する機会を与えた。

海外市場は国内と異なり伸び傾向があり、このころから韓国へ輸出したが、やはり韓国では現地生産が始まり輸出の伸びが止まった。中国は平成元年(1989年)に数台補償貿易ということで輸出し、平成4年(1992年)30台、翌年56台と出て、中国の海苔生産技術の向上に貢献した。

しかし我が国は、中国産、韓国産の海苔の輸入を制限していたので、この間に両国はUSA、EUへの輸出に活路を見出した。わが国は内需に拘っている内に海外での市場開拓に後れを取ってしまった。

海苔そのものの需要の減退、気候の変動、生産を担う経営体の減少、そして機械製作でも韓国の台頭などで自動化機械の需要が減少した。

しかし海苔の自動乾燥機出現は、ピークが一時的であったにしろ水産業界への貢献は目を見張るものがある。

(7) ホタルイカ目玉除去機

目立たないところで貢献している機械だが消費者目線の傑作。ホタルイカは生いかでもボイルいかでも食するときには眼球の水晶体が歯に当たるので、富山県の有限会社倉谷アルミ工作所(倉谷アルミ)と有限会社荒川機工(荒川機工)が共同で開発に取り組み、ほぼ2年で実機になった。両社により平成22年(2010年)1月26日付で特許出願されている。

原理は胴体を押さえないかの頭部から真空にしたノズルで眼球を吸い出すというもので、現行の機械は手作業の6倍のスピードで1分間に360尾処理できる。

加熱した茹でイカについては、兵庫県立農林水産技術総合センター、田島水産技術総合センター(田島センター)と、宮城県にある水産加工機器メーカー、株式会社ツネザワ工業(ツネザワ)との共同開発で、「茹でホタルイカ目玉除去機」が出来た。茹でると目玉が飛び出す特質を利用、機械化して5分間でホタルいか1000匹の目玉を除去可能となった。平成22年(2010年)手がけたというが両者は特許を出していない。

余談になるがホタルイカの漁獲は富山県、兵庫県が拮抗している。(了)

有楽町 慕情 (9)

津田孚人(85歳)

石坂泰三は第一生命に入社したときの会社への物足りなさ、矢野社長への畏敬の念を、著作「勇氣あることば」で、このように語っている。

「わたしが第一生命へ正式に入社したのは、大正4年(1915年)9月7日、役名は秘書役で、月給は120円だった。この時期、日本国内に生命保険会社は全国で約40社あり、第一生命は、そのうちの12,3番目の小規模な会社だった。会社は、いまの日本橋通三丁目の高島屋のところの一角にあって、本社には募集員から全部入れても60~70人程度しかいなかった。」

「秘書役ということで入社したのだが、不向きだったせいか、あまり秘書的な仕事は、しなかった。社長の矢野さんに内心甘えていたかもしれない。矢野さんもわたしの態度に不満だったと思うのだが、一度も小言は言われなかった。」

「矢野さんのお供で福島に出張したとき、駅前に矢野さん用のピカピカ光った人力車と、お伴用の人力車が迎えに出ていた。わたしは、うかつにも、いきなりピカピカのほうに乗ってしまった。お迎えの人たちは周章狼狽していたが、当の矢野さんは「い

いよ、行きなさい」と言われて、お伴用の車に乗られたそう。後日、福島支部長にその日の事情を聞き、顔の赤くなる思いをした。矢野さんという人はまったく立派な人だった」

矢野恒太が社長に就任したのは、大正4年(1915年)9月1日、石坂泰三が入社したのは、9月7日、ほぼ同じ時だった。当時、第一生命は、創立から第13期を迎えていた(創立は明治35年(1902年)9月15日)。会社は矢野恒太が理想とした「相互会社形式による保険会社」で、他の生保がとっていた代理店による契約募集の方式をとらず、社員による契約募集方式をとっていた。

初代社長は、矢野恒太ではない。矢野が留学中に知り合った元大和郡山藩の藩主で統計学者だった柳沢保恵伯爵、矢野は専務取締役として実質社業を取り仕切った。(柳沢家の本拠地は、大和郡山。初代藩主は、柳沢吉保で、保恵伯は6代目(?)。城にある記念館では、柳沢保恵伯が第一生命の創業者と紹介されている。)

矢野は、第一生命の本領は「最大の会社たらんとするにあらずして、常に最良の会社たらんとするにあり」とし、「确实、低廉、親切」をモットーとし経営した。創業10年目の大正元年(1912年)9月15日の決算では、保有契約高は2,276万8千余円、総資産は、268万4千余円、同業33社中の11位となり、名実ともに中堅生保の地位を確保するまでにはなっていた。

また、創業時の日本橋区新右衛門町の本社が借家だったのを、日本橋区通3丁目に150坪の土地を購入して、新社屋を明治39年8月に完成させ、9月に移転していた。現在の東京日本橋高島屋店の正面西北の部分で、新社屋は日本橋の一偉観となり、第一生命の社名を一段と高めた。

しかし、石坂の目には、業界地位が12か13番目、社員は60~70名の中小企業としか映らなかったようだ。まして非財閥系の企業では、気力喪失も無理ないところだった。

石坂の初仕事は、朝鮮の京城で施政5年記念博覧会があり、実業界から大橋新太郎、服部金太郎、矢野恒太などが参加、矢野社長のカバン持ちで京城へ随行することだった。

そして大正6年(1916年)9月、入社時に約束を得ていた洋行を実行する。約1年2か月にわたり、欧米諸国の生命保険会社を訪問、経営の実態をつぶさに視察してきた。

大学では独法を勉強したので最初ドイツを希望したが第一次世界大戦の最中で、ドイツには行けない。矢野社長が「君が言っている間に戦争は終わる。まずアメリカへ行きたまへ」ということで、一応、ニューヨークのメトロポリタン生命へ行くことにした。同社は世界一の規模、3カ月間滞在したがビル内の道を覚えることもできなかった。翌6年、ヨーロッパに行くが、航海の途中でアメリカが参戦、船は大西洋の真ん中であらゆる灯りを消して真っ暗闇の中を航行し、リバプールを経て、ロンドンへ到着した。しかし当地もドイツの飛行船ツェッペリン号が飛来して爆撃、町は恐怖に慄き、暗闇に沈んでいた。目的の保険会社を訪ねると、女性ばかり、男性は戦場に駆り出されて殆どいない。やむを得ず、別の保険会社を訪ねたが開店休業の始末、ロンドンは全くの無収穫となった。希望のドイツは敵国、フランスでもと思ったが、戦時のため身元調べ、手続きが厳しく、叶わない。

滞在していても意味がないので北野丸という日本船に乗り、平野丸が沈没した地中

海は通らずにアイルランドの北に出て、それからジグザクコースでセントヘレナ島を通過して27日間、ランプも何もなしで喜望峰に着き、ケープタウンからコロombo、シンガポールを経て神戸着、70日間かけて帰国した。

洋行の中で石坂は、ニューヨークで6週間にわたって世界最大のメトロポリタン生命を見学している。同社は、「最大なるが故に最良にあらざ、最良なるが故に最大なり (Not Best Because The Biggest But Biggest Because The Best)」という社是を掲げていた。

メトロポリタン生命の社是は、矢野恒太の掲げた第一生命の「最大の会社たらんとするにあらずして、常に最良の会社たらんとするにあり」の下敷きになっているように見える。しかし、戦後、石坂のあとを継いで社長、会長を務めた矢野一郎(矢野恒太の長男)が、「業界トップを狙うことはない。二番手でよろしい」と常に述べていたのを考えると、まったく同じではない。メトロポリタン生命の社是を知った石坂が、矢野恒太の理想「最大たるよりも最良たれ」を完全に受け入れていたかどうか、不明である。矢野恒太にしても、2位の地位に甘んずるなどということは決して許さなかったに違いない。

石坂は、こんなエピソードを紹介している。「矢野さんが、日本生命から安田生命に移った真相は、喧嘩別れしたこと。この人は気性も激しく、もともと人に使われるタイプでなかった。それはともかく、農商務省に保健課が出来て、矢野さんが初代の保険課長に就任すると、喧嘩した日本生命に検査に行った。当時の日本生命の社長は片岡直温で、滋賀県の警察部長を務めた人だったが、さすがの日本生命もカブトを脱いだ」

石坂は矢野恒太をすべて受け入れたわけではないように見える。矢野恒太は不満があっても小言はいっさい言わない人だった、と語っているので、何も伝えていなかったのかもしれないが……。

「矢野さんは、いつも暇な時には「ポケット論語」を読んでいた。その中に、「昼は論語を読み夜は盗みを為すも、なお遙かに、昼も夜も盗みを為すにまされり」という一文があった。わたしにしてみれば、昼も夜も泥棒専門というほうが、昼は善人面をしていながら夜は悪人となるより、よほど可愛い気がするように思われた。いつの時代でも、一面何食わぬ顔をして、裏であくどいことをしているのが多いのじゃないかと思った。

しかし、いま思えば、さきの一文は事業一筋に生命を賭けた矢野さんの人となりなのぞけて苦笑を禁じ得ない。」

「矢野さんは医者出身だから保険医学にも通じ、やっかいな保険数学を手がけ、経営の才能に長けていたので、保険業にはうってつけの人物だった。外国へ行き、相互組織という問題を研究して帰国した。大変な才人で、学問もよくでき、保険に必要な数学なども独学で勉強し、微分積分にも通じていた。」

「いつも仕事の大綱を把握して、細かい事には一切口を出さなかったが、気配りの出来る人だった」

矢野は、石坂が外遊中の大正5年6月、石坂と同じ貯金局にいて係長をしていた稲宮又吉を入社させている。創立時以来の先輩職員が多い中、石坂に十分な腕を振るわせるには腹心の部下が必要だろう、と考えたのである。稲宮は、石坂をよくたすけ、石坂社長の方針を体して、契約の伸展と経費節約を推進する積極的外野政策成功の立役者となった。(第一生命70年史)

一方で、矢野の金銭に関する無頓着さ、だらしなさに、困惑しながらもついていく秘書役としての生真面目さは、石坂のサラリーマン哲学の本領を感じさせる。

「矢野さんは、金銭欲のない人で自分の財産についても全然関心が無かったようだ。会社の外で活躍しているので、大事な実印まで預けっぱなしで、月給や他の収入など、すべて石坂が受け取って森村銀行へ預けていた。金が必要な時は「出してくれんか」とひとことというだけで、銀行に預金が残っていようがいが、お構いなしのわれ関せずといった調子だった。」「だから矢野さんも「まだあるか」などとヤボを言わず、わたしも「もう預金はありません」と口に出したこともなかった。」

「こんなわけで、金のない場合は、石坂が黙って立て替えて、あとで月給や賞与で埋めていく始末だった。預かっていた実印は、第一生命を辞めるちょっと前に、矢野さんの息子の一郎さん（第一生命社長、会長）が来るまで預かっていた。それにしても、実業界では型破りの人物だった。」

営業政策は、代理店を設けず、全国各地に支部をおいて積極的な拡販政策をとり、昭和7年8月期の決算で保有契約高は10億円に達して、業界二位の地位に上りつめた。創業して30年、石坂が入社して17年経過したところだった。この年、矢野恒太の長男で、三菱銀行に勤務していた矢野一郎が、入社し、初代財務課長に就任した。

石坂泰三は、昭和9年11月専務取締役就任、昭和13年11月、社長に就任した。

(つづく)

講演会のご案内

新三木会 7月講演会

第138回 7月20日(木)13:00 スターホール

演題・講師 「激化する戦略的競争時代の日本の核武装」

信 将・一橋大学法学研究科教授

申込受付：<https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6>

もしくは新三木会へ mail: フルネーム・所属(卒年記入)

会費: 会場出席(受付払い)2千円、夫人千円、学生無料

会場: 神田・一橋・如水会館

会費: 2千円

申し込みの際は、天地シニアネットワーク会員、又は見たと伝えてください。

会費は現地でお支払いください。

●次回予定

8月17日(木) 「大学の国際化について」

講師: 鈴木典比古 元国際基督教大学学長

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所: 〒116-0001 荒川区町屋3-2-116

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話・FAX: 03-3819-7